

高齢者に癒やしと生きがいを

東郷製作所

産業、医療、介護、福祉などさまざまな分野でロボットが活躍しています。国内のロボット産業の市場規模は、平成47年(2035年)には平成24年の11倍になるという推計も出ています。

今回は、そんな今「アツい」ロボット分野で、高齢者向けの赤ちゃんロボットを開発した東郷製作所にお邪魔し、話を伺ってきました。

何もできないロボット

東郷製作所が中京大学と共同開発したのは身長44センチ、体重1.2キロの赤ちゃんロボット「スマイビ」です。

揺れや傾きを感じるセンサーを内蔵しており、抱いてあやすと口を開けて笑ったり、ほおを赤らめて喜んだりします。1歳児から録音した約500語の言葉を発し、目、口、首もそれぞれ動くため、見せる反応はさまざま。悲しくなると青いランプで涙を流し、放置されると寝息をたてて寝てしまうこともあります。誰からも親しまれるよう、顔はシロイルカをモデルにしています。

スマイビの対象者は主に高齢者。人が本来持つ「世話をしたい」という気持ちを引き出し、癒やしや生きがいを与えることを目的としています。

「高齢者を癒すロボットは、ほかにもあ

りますが、スマイビは『何もできない』というのが最大の特徴。ここで差別化を図っています」と開発室室長の近藤寛さんは話します。

介護・福祉分野への参入

東郷製作所は、ばねなど自動車部品が主力の会社です。しかし、高齢化社会の到来を見据え、20年ほど前から部品加工技術を応用した介護・福祉製品事業に乗り出していました。

そんな製作所のもとに中京大学の加納政芳准教授が訪ねてきたのは、平成22年のことでした。以前から人に世話される赤ちゃんロボットの研究をしていた准教授は、ロボットにばねを使った機能を取り入れたいと考え、製作所を頼ってきたのでした。

「最初は相談という形でしたが、話を聞いていくうちに『うちが持っている樹脂ばねの製造技術でできるのではないか』と思うようになり、共同開発を始めることになりました」

初めてのロボット作りに開発は困難の連続。それでも、かわいらしさ、リアルさにこだわりの、初期の試作機から幾度となく改良を重ねました。そして、4年後の平成26年4月に完成。平成27年1月からは発売も始まりました。

幸せを届けたい

高齢者をメインターゲットとしているスマイビですが、その愛くるしさで子どもたちにも人気です。

「工場に社会見学に来た小学生に見せると、みんな興味津々で、ばねなどの本来の製品を全然見てくれないんです」と近藤さん。特に女の子に人気だといいます。

発売から2カ月がたち、購入者だけでなく、報道などでスマイビを知った人からも声が寄せられています。

奥さんにスマイビを買ってあげたという男性から「自然と笑顔になり、家の中が明るくなった」というお礼の手紙が届いたこともありました。

「そっとうい声を寄せていただけると、とてもうれしいですね。皆さんにもっと喜んでいただけるよう、これからも改良を重ねていくつもりです」

産業用ロボットなど「人の役に立つロボット」とは一線を画す癒し型赤ちゃんロボット「スマイビ」。

「スマイビを全国の人に知ってもらい、使ってもらいたい。そして、スマイビで幸せになってほしい」という近藤さんの言葉が印象的でした。

